

《資料》

## 『異聖歌作品集』未収録詩篇

——『ちいさなてんしのみたあき』エピローグほか一篇——

平 澤 信 一

### ■ 抄録

1905〔明治38〕年2月19日に岩手県紫波郡日詰町に生まれ、1973〔昭和48〕年4月22日、東京都日野市で没した童謡詩人・異聖歌の詩歌を集成した『異聖歌作品集』上下巻（1977〔昭和52〕年、同刊行会）に収録されていない『ちいさなてんしのみたあき』のひらがなの初出本文およびエピローグと、その他断片を、今日では入手が困難な、作品掲載誌の月報を紐解きつつ、紹介したもの。《 》は聖歌作品の、〈 〉は月報からの引用である。

### ■ キーワード

異聖歌 童謡 たきび ちいさなてんしのみたあき

### ■ Key Word

Seika Tatsumi Nursery Rhyme TAKIBI(Bonfire) Autumn Seen by a Little Angel

異聖歌（本名・野村七蔵）は1905〔明治38〕年2月19日に、宮沢賢治の父方の祖母キンの実家がある岩手県紫波郡日詰町に生まれ、1973〔昭和48〕年4月22日、東京都日野市で没した童謡作家である。代表作は、あの「たきび」である。聖歌が注目された最初は、『赤い鳥』1925〔大正14〕年10月号に投稿された童謡「水口（みなくち）」であった。日詰の田を散歩していて目に入った、水口に集まるオタマジャクシの姿を描いたものだ。当時、『赤い鳥』の童謡の選者をしていた北原白秋は、この作品を「推奨」（特に優れている作品）とし、「異君の「水口」は、おっとりとしていい気品のある芸術童謡です。めずらしいほどいい。」と評したという。同号には、また「家垣根路（いぐねぢ）」でも「佳作」として、掲載された。このように、岩手県の故郷を原風景として作品を書いていた聖歌であるが、ペンネームからも窺えるように、洗礼を受けて、クリスチャンとなる。そして、新美南吉を顕彰し、新潮文庫版『宮沢賢治童話集』上下巻（1961〔昭和36〕年7月）を編み、自らは、ここで紹介する絵本『ちいさなてんしのみたあき』の詩文を書いた。

《えっへん／わたしは てんし ちいさな ちいさな てんしの／はなから はなへ とんでつて／ちいさな あきを みつけるの／さあて／どんな ところに かくれて いるかな／みえるかな》

『ちいさなてんしのみたあき』は、月刊キリスト教保育絵本『こどものせかい』（至光社）1963〔昭和

38] 年9月号として刊行された。24頁からなる絵本であり、絵を得田満子（のち神田満子）が担当している。

引用した冒頭に続き、アリの様子を描いた《やあい/ありの おうちの ひっこしだ/カンナのおうちの おおかじだ/ゆうひに てられて まるやけだ//ちがうぞ/ちがうぞ/ああ なーんだ/ごくろの み なんだ/おっこちて//はぜたで ありんぼ/なめに きた/あまいぞ あまいぞ/それ なめろ/みりの あきだで/かついでけ》へと展開する。ザクロに群がるアリの様子をじっと観察しているのである。

同号の月報「母親通信」では、絵本作家でもある三宅みちが〈小さな天使の目は、私たちの身近にみちこばれている秋を、美しくとらえております。このような目、それがこどもたちの目なのです。〉と解説している。絵では、カンナ、マリーゴールド、サルビア、アリが描かれており、三宅は解説を、こう続ける。〈お庭のガーベラやマリーゴールドやサルビア、カンナが咲く花壇、それは平凡であっても美しい場所です。子どもは直感的に、それぞれの姿のおもしろさを感じとるでしょう。しかもありふれた花のひとつひとつにふしぎな生の営みがしまわれています。〉〈その根もとに動くアリたち、そこにも神秘があります。アリのお通りすじや、なわばりのあること、どんなものを巣に運ぶかなど、見あきないアリの動きからとらえてみましょう。〉と。

そうして、詩は続く。《こがねむしが/こがねむしと/おはなし してる/「ふようは おおきな おおきな ホテルだよ/「ふうーン/「おいでよ/ギリシャの おおきな つぼに/みつだってたくさんつまっているよ/「ふうーン/あげはちょうがね/いまに おおきな ストローで/みんな みんな のんじゃうよ/「ふうーン/おっほん/こがねむしの ひみつの はなし/きいた》

解説はこうだ。〈フヨウはムクゲとともに、初秋に花さく数少ない木本類のひとつです。しかも、花が大きく美しく、構造も変わっています。花のつくりに興味があれば、花の中央に突出したメシベ、その花柱についたオシベ、大きな回旋状の花びら、その根もとをつつむガク、その外側につく狭い苞など、わかりやすく観察できるでしょう。またこの美しい花を、ハナムグリなどコガネムシのなかまが食べにくるのもみられます。〉コガネムシの話聞いたのは、きっと小さな天使であろう。

詩は更に続く。《ななくさ さいた ななくさ さいた//むしが/ホルーンを/みがいてる//おおきな/パーティー/ひらかれる》——そして解説。〈夏にはたくましかった野の花も、秋を迎えてやさしい花々に飾られてまいります。七草はその代表的なものです、いまではみんなを一度にみつけ出すことはちょっとむずかしいでしょう。それでもその風情だけはくみとれるでしょう。細長い花、やさしい花、おもしろい草などが、お互いに調和しあっている静かさのなかでは、ひときわめだつまっかなヒガンバナさえ、かえって秋らしさをそえているようです。〉〈また秋の野に忘れがたいのは虫たちです。秋は耳の季節、コオロギ、バッタ、キリギリス、カマキリなどの直翅類たちの一群が目だち、草々を眺めていると、そうした虫の楽隊が聞こえてくるような気がします。〉と、失われてゆく自然の現在と虫たちの姿が語られる。

《ゆうやけ いっぱい/そら いっぱい/おそらの ひけしの/しょうぼうしゃ/それ いけ やれ とべ/あかとんぼ》——そうして紙面には、一面の赤とんぼが描かれる。これでおしまい、であらうか？

というのも、聖歌は最晩年、これらのひらがな詩篇を漢字かな交じり、句読点付きの文に変更し、詩集「三、四年生のための詩とうた『あらしの中も にじの輪も』」の一部として収録しようとした。

これらは「ちいさな天使」「アリと ザクロ」「ひみつの はなし」「大きなパーティー」「タやけ とんぼ」等と各々タイトルを付され収録されているが、エピローグだけが収録されていないのだ。そして『あらしの中も にじの輪』は未刊に終わったのだが、その構想を汲んで、現在、聖歌の詩歌の資料を最も数多く収録している『異聖歌作品集』上下巻(1977[昭和52]年、同刊行会)にも、エピローグに該当する詩篇はないのだ(初出本文がひらがな書きであることも、もちろんわからない)。したがって、エピローグは『異聖歌作品集』未収録詩篇となる。それを、ここに紹介しておこう。

《えっへん/わたしは てんし/ちいさな ちいさな/おはなしを/たくさん たくさん/みつけたの/——でも はなしきれないや/いっしょに いこう/のはらや やまへ/ちいさな あきを/みつけにさ》

『ちいさなてんしのみたあき』は、聖歌生誕百年の2005[平成17]年に『こどものせかい』9月号として再刊された。平成の時代に復刊されたのである。そのときの月報「にじのひろば」で、絵本制作者で発行者の武市八十雄は「秋風がびゅうっと吹いてきて、青い空を見あげると、なにか天使が天国からやってきそうな気がします」「ちっちゃな天使がいいね。そしてちっちゃな天使が秋を満喫するんだよ。秋にはたくさん花がさくし、それに七草だってあるし……」こんなとりとめもない話を、かきねのかきねのまがりかど…(「たきび」より)の作詞者で皆さんよくご存知の詩人・異聖歌先生としているうちに、『ちいさなてんしのみたあき』という絵本が誕生しました。昭和38年、今から42年前のことです。と振り返っている。そして「異先生のこの絵本のしめくくりの詩が、高い空から聞こえてくるような気がしてなりません。」と、その回想を結んでいる。エピローグは、やはり外されてはならなかったのでは、ないだろうか？ 少なくともエピローグがないと、ふたつの視線で見ていた風景が、ひとつの視線で見られているように、平板に感じられてならない。いま『異聖歌作品集』を開いても、このエピローグが読めないのは非常に残念なことではないだろうか？ 本稿は、令和におけるエピローグの復活を促すものである。ちなみに、1963[昭和38]年版と2005[平成17]年版の両月報には《てんしが/あおいそらから/おりてくるかしら/あきぞら はい/あかとんぼ はい/ほいの ほいと/おりてくるかしら》という作品断片も掲載されている。これも『異聖歌作品集』には、未収録である。

#### 参考文献

『異聖歌作品集』上下巻(1977[昭和52]年、同刊行会)

『たきびの詩人 異聖歌』(2018[平成30]年、日野市郷土資料館)

月刊キリスト教保育絵本『こどものせかい』(至光社)1963[昭和38]年9月号および月報

月刊キリスト教保育絵本『こどものせかい』(至光社)2005[平成17]年9月号および月報

※本稿の発表をご快諾下さった著作権継承者の野村文子氏と、2005[平成17]年版月報をお見せ下さった日野市郷土資料館の北村澄江氏に、厚くお礼申し上げる。

※本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C「作家の文学形成と『地方同学コミュニティ』の研究—井伏・高田と宮沢賢治の場合:課題番号20K00331」)の研究成果に拠るものである。